

古墳時代の のみ とり ばし い せき 蛭取橋遺跡

(日時) 平成 20 年 2 月 23 日 (土) ~ 24 日 (日)

(会場) 新発田市立図書館 坪川記念室

(主催) 新発田市教育委員会生涯学習課

〒959-2323 新発田市乙次 281 番地 2 TEL.0254-26-2163 (直通)

はじめに

蛭取橋遺跡は、新発田市竹ヶ花字菱川谷地 451・452 番地ほかに位置しています。

平成 11 年に三悠乙見江地区の県営ほ場整備事業が決定し、蛭取橋遺跡とそのすぐ北側に位置する神明裏遺跡の一部が工事の対象範囲となりました。そこで、工事に先立ち新発田市教育委員会が主体となって発掘調査を実施しました。

調査面積は、蛭取橋遺跡が 1,540 m²、神明裏遺跡が 584 m²で、両者を合わせると 2,124 m²となります。平成 18 年 8 月~12 月までの 5 ヶ月間、発掘調査を実施し、その後、調査の際に作成した記録や写真などの整理作業を平成 19 年 10 月まで行いました。

遺跡の概要

蛭取橋遺跡と神明裏遺跡は、新発田市の南部を流れる佐々木川の支流、北江と西江の中間地点に位置しています。加治川によって作られた扇状地に立地していて、標高は 8.5~8.7m です。

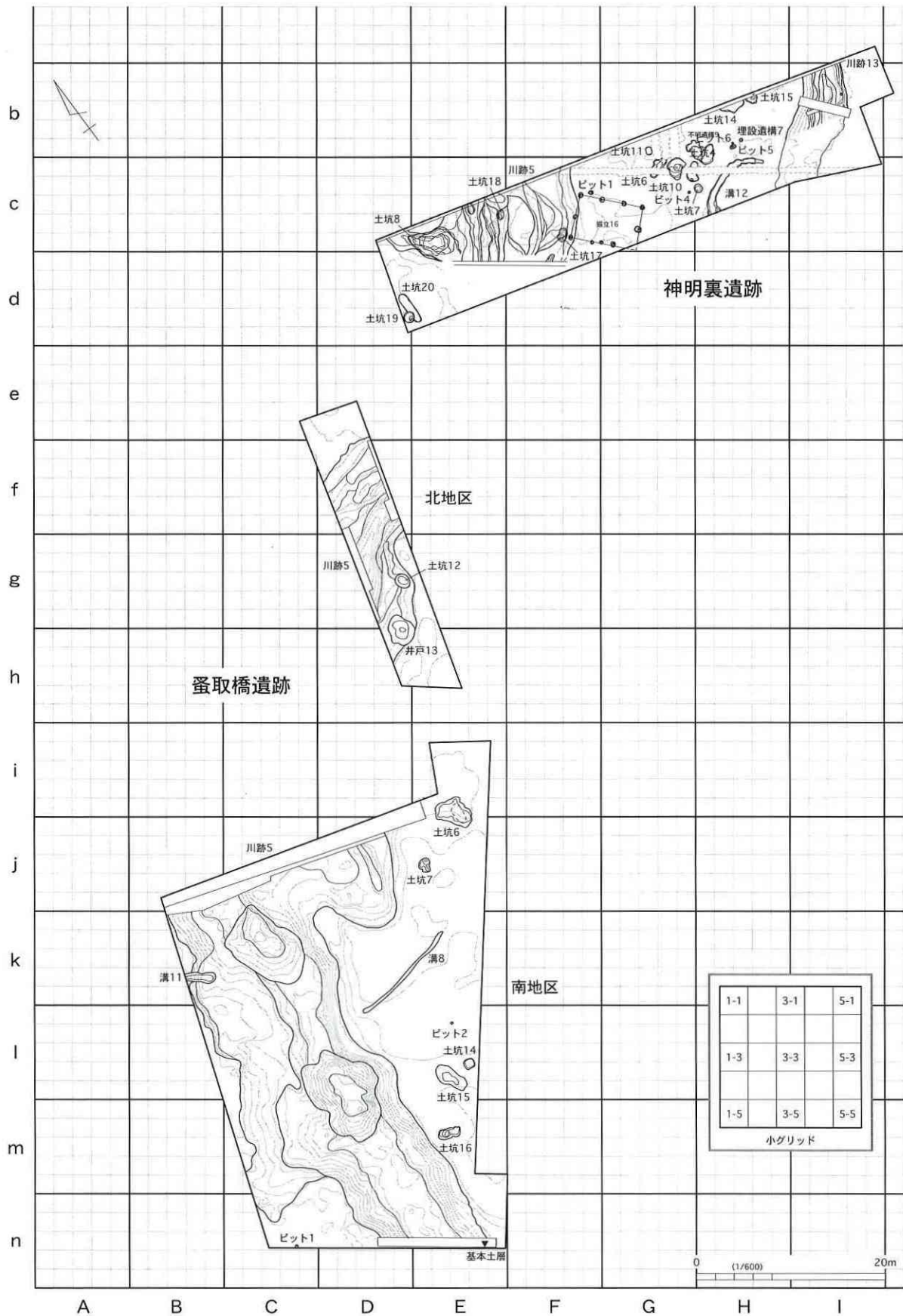
遺跡は、古墳時代後期(約 1500 年前=6 世紀前半)を中心に、室町時代(約 600 年前=15 世紀)まで断続的に営まれていました。

市内の古墳時代後期については、調査した遺跡が少なく、様子がよくわかっていません。蛭取橋・神明裏遺跡も含め、今後調査事例が増えていくことで、明らかになっていくものと思われます。



遺跡の位置図

(S=1/25,000 国土地理院)



蚤取橋遺跡・神明裏遺跡 全体図

(S=1/600)

調査の概要

昔の人々が残した生活の痕跡のうち、地面に残された穴や溝など持ち運ぶことのできない不動産的なものを“遺構”、土器や石器といった持ち運ぶことのできる道具のことを“遺物”といいます。

蚤取橋・神明裏遺跡では、川跡などの遺構から土器・木製品といった遺物が数多く出土しました。

遺 構

古墳時代後期の遺構として、溝、井戸跡、そして土坑やピットと呼ばれる穴などのほかに川跡を検出しました。

川跡は、幅 10～25.2m、深さ 0.5～1.2mほどで、やや蛇行しながら南北方向に流れていた様子が確認できました。川底には、所々に深みや中洲状の高まりがみられました。

遺 物

川跡からは、古墳時代後期の土器や木製品が非常に多く出土しました。なかでも、丸木梯子や剣形木製品の出土は、全国的にも貴重な事例といえます。

丸木梯子は、一本の木を刻み込んで作られた梯子です。“刻み梯子”ともいいます。川の流れに平行するように出土しました。もともと高床式建物の入り口施設として使われていたものが、何らかの理由で川に廃棄されたと考えられます。材質はスギで、長さ 3.35m、幅 20.0cm、厚さ 13.0cm、踏み段は 8 段あります。下端の一部を欠損していますが、全体の形がわかる事例としては、全国的にも珍しいものです。古墳時代の梯子としては、県内では御井戸B 遺跡（新潟市 旧巻町）に次いで 2 例目の出土となりました。

剣形木製品は、祭祀の際に形代^{かたしろ}として使用された、剣の形を象^{かたど}った木製品です。材質はスギで、長さ 39.4cm、幅 4.4cm、厚さ 2.2cm の完形品です。古墳時代のものとしては、県内では初めての出土事例です。また、祭祀に関係する遺物としては、齋串^{いぐし}や手捏土器^{てづくねどき}も出土しました。

このほかにも、土師器^{はじき}と呼ばれる素焼きの土器や須恵器^{すえき}という硬質の土器、木製の建物部材などがたくさん出土しました。特に、古墳時代の須恵器は市内では出土例が少なく、貴重な資料といえます。



川跡（南から）



川跡 遺物出土状況（南から）



川跡 木製品出土状況（北東から）



井戸跡（南から）



丸木梯子 出土状況（西から）



丸木梯子



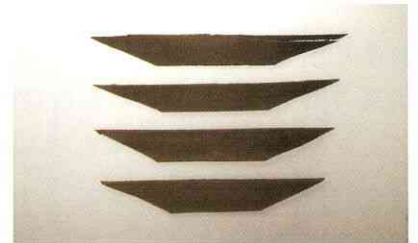
剣形木製品 出土状況（西から）



須恵器 出土状況
（東から）



須恵器



斎串

おわりに

蚤取橋・神明裏遺跡では、6世紀前半の古墳時代後期の川跡から、非常に多くの遺物が出土しました。中でも、丸木梯子と剣形木製品の出土は特筆すべき成果といえるでしょう。

しかし課題も残りました。丸木梯子については、化学分析（C14年代測定法）を行ったところ、材料のスギが4世紀後半頃に伐採されたものであることがわかりました。梯子が川に廃棄されたのは、一緒に出土した土器から、6世紀前半と考えられるので、木を伐採してからそれを梯子として利用・廃棄するまで、100年以上も経過したことになります。こんなにも長い期間、梯子として使い続けたのでしょうか？また、剣形木製品についても、実際はどのように祭祀で使われていたのか、同じく祭祀で使用されたと考えられる斎串や手捏土器とあわせて検討する必要があります。

今後は、これらの課題を解明していくことで、当時の人々の生活の様子をより正確に理解し、復元していくことができると考えています。

マ×知識

土師器……弥生土器の系譜を引く古墳時代～平安時代の素焼きの土器。摂氏 600～750 度で焼かれ、色は橙色・赤褐色。須恵器に比べて軟質です。

須恵器……古墳時代中期から平安時代まで見られる灰色～青灰色で硬質の焼き物。源流は朝鮮半島。半地下式の^{あながま}竈で焼かれ、その温度は摂氏 1100 度にまで達します。

手捏土器……ミニチュアの土器。その大きさから、物を入れることに適しておらず、祭祀に使われたと考えられます。

形代……人や舟、刀などを^{かたど}象ったミニチュア。呪具として使われました。

斎串……細長い薄板の両端を尖らせ、側辺に切り込みなどをほどこした串状の木製品。お祓いを行う際の結界として使用したりします。